



企画にあたって

野出孝一

(佐賀大学医学部循環器内科教授)

COVID-19感染症は、中国武漢で感染者が報告され、2年が経過した現在でも全世界でパンデミック状態であり、社会経済活動に大きな負の影響を与えている。リモートワークやオンライン診療など、遠隔医療の流れも加速している。COVID-19に対するワクチン開発も従来の創薬とは比較にならないスピードで行われ、わが国でもワクチン接種が進んでいるところである。mRNA ワクチンの開発や臨床治験の在り方、人流を考慮した社会疫学的な予測研究など、COVID-19感染が医療・医学に及ぼした効果も図り知れない。

COVID-19感染による死亡や予後悪化因子は、気管支炎・肺炎などの呼吸器疾患が主であるが、血管炎や血栓形成による脳梗塞・肺梗塞、心筋炎や虚血による心不全と不整脈などの循環器疾患の占める割合も大きい。COVID-19の無症候性感染の数カ月後、心臓 MRI で評価すると心筋炎が一部の患者に発症していたことも報告されている。一方、受診控えによる高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病の管理の甘さが循環器病の発症の引き金になっていく可能性もある。

また、心血管疾患を合併した COVID-19感染症の予後が悪いことも周知の事実である。従って、COVID-19感染症患者の診療を行うにあたって心血管疾患を BNP、トロポニンなどの血液バイオマーカーや心エコー、MRI などの画像診断を駆使して適切に評価し、管理する必要がある。血栓治療に関しても、COVID-19感染では必ずしも凝固系のみが亢進しているわけではなく、線溶系とのバランスで考えていくことが出血を予防するうえでも重要である。

日本循環器学会 COVID-19対策特命チームは、循環器関連学会から成る日本循環器連合の委員で構成されているが、今回はその中心メンバーに、それぞれの領域における COVID-19感染による心血管合併症対策をご執筆いただいた。

本特集が、日々精力的に COVID-19感染対応にあたっておられる先生方の診療の一助になれば幸いである。